

「日本語の教材や図書に関する新しい情報がほしい」という海外の先生方の声をよく聞きます。このコーナーでは、最近出版された日本語教材や参考書を中心に紹介していきます。紙面の制約上、一回に多くの本を紹介できませんが、海外の先生にとって使いやすい教材「授業や研究の役に立つ本」、また、「知っていると便利な図書・資料」などを取り上げます。

- データ凡例 1 著者 2 出版社 3 刊行年月 4 ISBN 5 判型・ページ数 6 定価 7 その他

学習者の誤用とその背景と、対処法を考えるための参考書

『日本語教科書の落とし穴』



データ

- 1 新屋映子、姫野伴子、守屋三千代著
2 発行：アルク(〒168 8611 東京都杉並区永福2 54 12/TEL 03 3323 0062 FAX 03 3323 2021)
3 1999年11月30日
4 A 7574 0156 6
5 B 5 判
234ページ
1 995円

この本は教師の教え方、教科書や参考書に原因があると考えられる学習者の誤用を取り上げ、学習者が失敗しないように教えるコツを具体的に提示した教師用参考書です。

構成と内容

全体は20課から成り、各課の構成は次のようになっています。「ある日の教室で/ある日の放課後」では問題となる誤用例、「ここが落とし穴！」では誤用を生じさせた教科書と教え方に潜んでいる「落とし穴」、「解説」では誤用の背景、「実際の授業」では考えられる対処法が

それぞれ記述されています。

「第9課 無助詞」を例に見ていきましょう。「ある日の放課後」卒業生が「先生、これを召し上がってください。」と言って先生におみやげを渡す場面が取り上げられています。文法的には正しいはずなのに、どこか不自然に感じられます。この場合「先生、これ、召し上がってください」と言ったほうが自然に感じられるということです。

「ここが落とし穴」では、教室では「私は一電車と一バスで一学校へ来ます。」と教師も学生も助詞を強調した言い方をしてしまいがちですが、一歩教室の外に出ると、そこには無助詞の話しとばがあふれていることが指摘されています。またここでは話しことばによく出てくる無助詞文に単なる省略のものと独自の機能を持つものがあることが指摘されています。

「解説」では、助詞を省略してもいい、省略してはいけない、省略しなければ

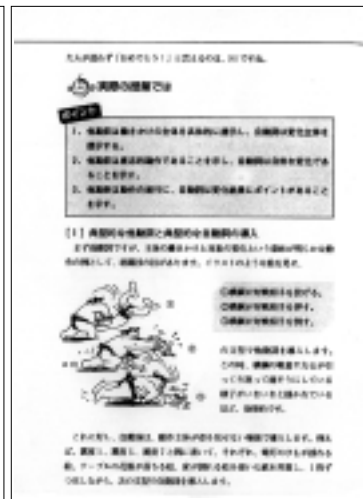
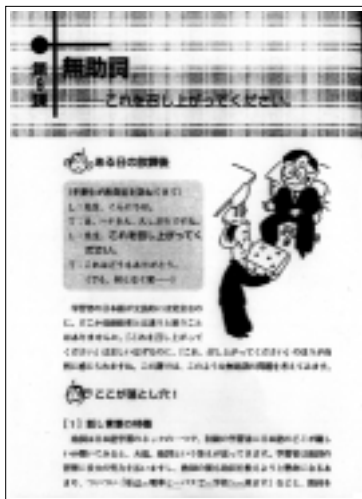
ならないという三つの場合の機能についてそれぞれ詳しく説明されています。

最後の「実際の授業」では、無助詞がいちばん自然になる場面が例文とイラストでいくつかの種類に分けて提示されており、教室で扱ったほうがいいものとその扱い方についても説明されています。

使い方

この本は各課が独立しているので、順番に見ていくこともできますし、関心のあるところだけ利用することもできます。また、上級の学習者なら自分の間違いやその間違いの背景を知ることができますし、教師なら誤用を避ける具体的な方法について、実際の授業のヒントを得ることができます。

なお、巻末にチェックシートが付いています。それは本文で取り上げた20項目のそれぞれについて、学習者の理解を確認するのに使うことができる問題を集めたものです。



『日本語の発音教室 理論と練習』



データ

■田中真一、窪園晴夫◎発行:くろし  
 お出版(〒112 0002 東京都文京区  
 小石川 3 16 5 / TEL.03 5684  
 3389 FAX.03 5684 4762) 1999年  
 10月1日 4A 87424 176 X 5A 4判・  
 140ページ 62,100円 7CD付 別売  
 音声テープ 4A 87424 180 8560分  
 2巻 62,520円

日本語の発音や音声をきちんと勉強したいという人は多いと思います。しかし日本語の音声を全体的に説明した教材は、これまでほとんどが日本人教師を対象にしたもので、ノンネイティブ学習者のためのものはあまりありませんでした。

ここで紹介する教材は、本来は日本語を勉強する外国人留学生のために書かれたものなので、ノンネイティブの学習者が日本語の発音を勉強するのに使えます。

CD付きで、聞きながら勉強できる

発音の練習をするときには、本を読むだけでなく、実際に音を聞けば、もっとよく理解することができます。この教科書にはCDが付いているので、教科書の例文や練習問題の一部を、日本人の発音を実際に聞きながら勉強することができます。

また、別売りですが、カセットテープもあります。CDが使えない環境の人は、こちらを使うことができます。なお、テープのほうには、例文と練習問題がすべて録音されています。

役に立つ「イントネーション」の章

この本は、第1章「母音と子音」、第2章「リズム」、第3章「アクセント」、第4章「イントネーション」という構成

になっています。その中で、第4章のイントネーションの説明は大切で、この教材のいちばんの特徴と言えるでしょう。

日本語をできるだけ自然な発音で話すためには、単語のアクセントや文の意味を考えながら、文全体を正しいイントネーションで発音することが必要です。しかしこれまでの本では、イントネーションの説明は少ししかないことが多く、またその内容は、ほとんどが文末のイントネーションのことだけでした。

それに対してこの本では、イントネーションのことを多くのページを使って説明しています。文末のことだけでなく、単語のアクセントと文のイントネーションとの関係や、文のフォーカス(聞いている人にいちばん伝えたい部分)がイントネーションにどう現れるか、文の構造の違いをイントネーションでどう区別するかなど、文全体のイントネーションについてくわしく知ることができます。

発音の理論的知識を身に付けるために

もちろんイントネーションだけではなく、音の変化や拍の特徴、アクセントの規則などいろいろいるなことが、言語学・音声学の立場から説明されています。説明には歌や俳句、マンガなども使われ、日本語の発音の「理論」を理解することができます。

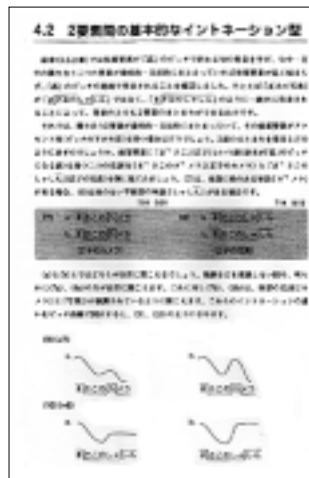
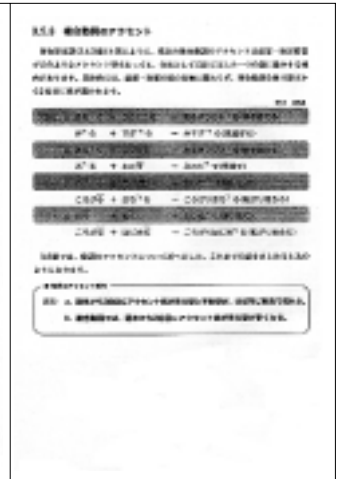
ただし「練習」については、「気をつけて発音しましょう」というだけのものがほとんどで、その音の苦

手な人がどうすれば上手に発音できるようになるかという具体的な練習方法のアイデアは、紹介されていません。ですからこの本は「日本語が上手に発音できるようになりたい」という人よりも、「実際に発音を聞きながら、日本語の聞き取りを練習したい」という人や「日本語の発音についての理論的な知識を身につけたい」という人に向いていると言えます。

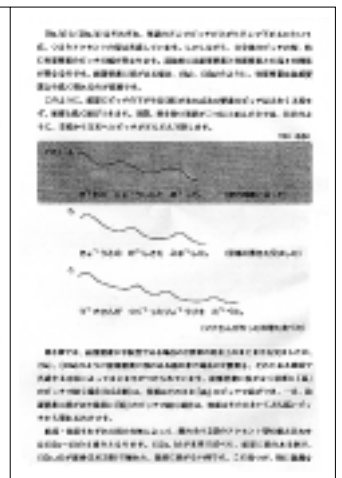
なお、本文の漢字にはふりがなもありますが、一度出てきたものには次からはつけられていません。また難しい語彙もたくさん出てきますので、本文の説明を正しく理解するためには十分な日本語力が必要です。



P. 96 - 97



P. 82 - 83



p.18~21は、以下の日本語国際センター専任講師が図書を選び、分担して紹介文を執筆しました。

高偉建、磯村一弘、内藤満、木山登茂子、向井園子、藤長かおる(執筆順)







# 初級からまとまりのある文章を練習する

## 『みんなの日本語初級 やさしい作文』

### データ

■門脇薫、西馬薫発行：スリーエーネットワーク 〒101 0064 東京都千代田区猿樂町2 6 3(松栄ビル) / TEL .03 3292 5751 FAX .03 3292 6195) 1999年11月12日 4 88319 142 75A 4判・124ページ 1 260円

■別冊 解答付

これは、初級からまとまった文章が書けるようになるためのワークブックです。特定の語彙や文型を使って短文を作るような作文練習ではなく、談話の流れを意識させる作文練習が特色になっています。全部で20のユニットがあり、基礎編と応用編に分かれています。ユニット1～15は基礎編で、『みんなの日本語』初級I、初級IIの語彙や文型を使っています。ユニット16～20は応用編で、意見文を書くなど中級につなげる練習になっています。ユニットごとに、「わたしの家

族」「わたしの国・町」「楽しい一日」などの身近なテーマが決められています。また、別冊に、新出語彙の英語・中国語・韓国語の翻訳や教師用マニュアルが収められています。

ユニットは、次の①～⑥で構成されています。①「フローチャート」では、談話の流れがわかるように、作文の全体的な構成を図で示しています。例えば、「旅行」というテーマの作文では、まず、どこへ行ったか、次に、行ったところの説明、最後に全体的なコメントを書くという3段階の構成が示されています。②「モデル文」は文章の構成をわかりやすく示す具体例です。③「作文のポイント」には談話レベルで注意する点の練習があります。④「みんなで話しましょう」には、テーマについて話し合うための質問が出ています。但し、ユニット1～4では、代わりに「関連語彙」が載せられています。⑤「作文メモ」は作文を書く準備

として、作文の各構成部分の中心文をメモするためのページで、⑥「書きましよう」は実際の作文の原稿として使えるページです。

この教材は、『みんなの日本語』初級I、初級IIに準拠していますが、身近なテーマで作文を書いてみようと思う初級の学習者なら、だれでも使えるでしょう。



P. 45

# 学ぶこと、教えることについて考えたい人のための本

## 『日本語教育と日本語学習 - 学習戦略論にむけて - 』

### データ

■J.V. ネウストブニー、伴紀子、宮崎里司、浜田麻里、吉野文、横須賀柳子、村岡英裕、伊東祐郎、岡崎眸、岡崎敏雄、斉藤里美、田中望、春原憲一郎、H.マリオット、J.ルビン著、J.V. ネウストブニー、宮崎里司 編 発行：くろしお出版 〒112 0002 東京都文京区小石川3 16 5 / TEL .03 5684 3389 FAX .03 5684 4762) 1999年10月1日 4 87424 179 45 A 5判・240ページ 2 310円

この本は、学習戦略\*に関するこれまでの研究の成果を、日本語教育の立場からまとめたものです。気鋭の研究者による15の論考は、読者に多くの示唆を与えてくれることでしょう。

全体は、総論(第1章～4章)各論(第5章～10章) 学習戦略への提言(第11章～15章)という3つの部分から成っています。

まず、第1部の「総論」では、学習戦略とは何かを明らかにし、90年代初頭から現在に到るまでの日本語教育における学習戦略研究の流れを概観した上で、学習戦略についての実証的な研究方法が整理されています。

次に、第2部の「各論」では、文法的学習戦略、語彙や漢字学習の学習戦略、読解学習戦略など、日本語教育における学習戦略の各研究領域について、議論がすすめられています。また、ここでは、学習スタイル、確信(ピリーフ)といった学習戦略と関係のある問題についても触れられて

います。

最後に、第3部の「学習戦略への提言」では、学習戦略の意味について、社会や教育現場と関連して、さまざまな視点から意見が出されています。

この分野の研究に興味のある人はもちろんのこと、教えること、学ぶこと、そして教育とは何かということに関心を持っている現場の先生方に、ぜひ薦めたい一冊です。

### (注)

\*学習戦略とは「学習者が言語を習得するために自律的に使っているいろいろな行動(本書3頁)と定義されています。



表紙